

レジャー（ゆとり）の視点から見た宗教行事について

— 題目講中を事例として —

○ 横山 彩（東海大学大学院） 西野 仁（東海大学）

I. はじめに

「レジャー」という概念は西洋文化から日本へ明治初期に紹介され、その西洋発の概念を中心に解釈されてきた。「レジャー」は“人生を単に生き延びるだけでなく、「ゆとり」「くつろぎ」を持ち、意味のある生活をする”という考えが基盤にあり、選択の自由性と、内発的な動機によって引き起こされる活動として理解されている。こうした考えは決して西洋文化特有の考えではなく、どの文化にも共通する。だとすれば、日本文化の中にも「ゆとり」「くつろぎ」「レジャー」と語句は異なっても、人々の生活の中に根付いた行事や習慣から同じような活動を見出す事ができるのではないだろうか。

人々が生活の中で「ゆとり」「くつろぎ」「やすらぎ」を求め、そして成長を目指すことは、人類共通の考えである。「レジャー」の起源は古代ギリシャ時代にアリストテレスがスコレー、閑暇、幸福（エウダイモニア）の考えから発したとされ、キリスト教の活動とともに教会を中心に西洋文化の中で発展した。我が国ではどうだったのだろうか。「ゆとり」「くつろぎ」「やすらぎ」などは宗教の中心を占めてきた寺社の活動と関係していたのではないだろうか。寺社は時として「ゆとり」「くつろぎ」「やすらぎ」を実感する「時」と「場所」であったのではないか。またそれらの機会は宗教行事（宗教儀式とそれに付帯して派生した祭り・縁日）を通じて提供されたのではないかと推測し、その実態を探った。その過程で「題目講中」の存在が明らかになってきた。

II. 研究目的と方法

本研究は寺院の宗教行事がどのように「ゆとり」「くつろぎ」「やすらぎ」を実感する機会となっていたかを「題目講中」を中心に明らかにしていく事を目的とする。そのために、以前「題目講中」に参加していた人4名にインタビューを行った。

III. 結果及び考察

「講中」は「講」とも言われ、同じ信仰の者が大勢で信仰儀礼や修行を行う集団のことを言う。日本の宗教界にはこのような「講」が全国各地で数多くみられ、民間信仰の「大山講」「富士講」「伊勢講」「観音講」「太子講」。仏教信仰の浄土真宗は「報恩講」日蓮宗は「題目講（講中）」などがある。「題目講中」とは題目の書かれた曼荼羅を礼拝し、題目を唱えることから称された。

日蓮宗寺院では、秋になると御会式が開かれる。御会式とは日蓮宗開祖である日蓮聖人の忌日に行う報恩会であり、10月13日を中心にして全国各地の日蓮宗寺院で法要が営まれる。東京池上本門寺は最も盛大で、全国より多くの「題目講中」が集まり、万灯をささげ、笛と鐘、太鼓をたたき、纏を振って参拝する。40年程前はどこの寺院でも万灯行列があった。しかし現在はこの風景を見る機会は減り、25年程前から万灯行列の参拝が減少したため、御会式法要だけにしたと寺院関係者へのインタビューより分かった。その原因として、各寺院の「題目講中」解散があげられ、御会式は「題目講中」との関係が強かったものと思われる。そこで現在は解散してしまったが、以前、「題目講中」に参加していた4

名に当時の「題目講中」では何が行われていたのか、その時どのように感じていたのかインタビューをした。

寺院周辺在住の日蓮宗信者が、地区により3つの「題目講中」を結成し、それぞれの講中で毎月一度、「月並み題目」と言い、月当番の家に夜7時に集まり、団扇太鼓を叩き、お経と題目を唱え、終わると食事、またはお茶とお菓子を食べ、団欒をしていた。住職も参加し、仏教の教えやお経についての法話をし、勉強会も兼ねていた。構成メンバーは一軒から一人、もしくは二人が参加し、殆どが年寄りの女性、女性が欠席の時は男性、時に夫婦で参加する事もあった。寺院門前地区のA講中は10軒、その隣地区のB講中は27軒、その隣地区のC講中は18軒で構成されていた。参加者は中心となる寺院の檀家だけでなく、他寺の檀家もいた。参加、脱会は自由であったが家の所在場所により講中が決まっていた。御会式の前夜にそれぞれの講中が万灯を作り、当日は万灯と一緒に講中の人たちが行列をつくり、太鼓を叩いてその地区から寺へ向かった。近隣にある他寺院の御会式にも万灯をリヤカーに乗せて講中の人たちと運び、門前から万灯を持ち太鼓を叩いて参拝した。毎年10数ヶ寺へ行ったが、30年程前に他寺院へ行くのを止めてしまった。20年程前に自寺の御会式も行列を作らなくなり、その後、万灯だけ作って本堂の前に飾っていたが、15年程前にすべて止めてしまった。40数年前の御会式は本堂の前に舞台を作って法要後に日蓮聖人についての演劇を劇団が上演し、大人も子どもも皆で楽しんだ。一度、全講中の人たちと皆で身延山へ参拝に行った。

「月並み題目」に参加すると皆で美味しい食事を頂き、ゆっくり話が出来て、情報交換にもなり楽しかった。月当番になると家に大勢に人が集まるので、家族中でお持て成しをした。子ども達も特別な日と楽しみに待っていた。今でもお経を聞くとホットする。「月並み題目」「御会式」も公然と家を空ける事ができる日だった。方々のお寺の御会式に皆で出かけていくのが楽しかった。「月並み講中」では住職の話が勉強になり今でもためになっている。参加して初めは年寄りばかりで嫌だったけれど、様々な話を聞き良い時間だった。

以上のことから、「題目講中」は、仏教の教えの中で人びとが学び、地域の人々が良い関係を作り、そして信仰的な安心を得る事で、人間の生き方はどうあるべきか、その基準に従い自らを見つめ、結果的に「ゆとり」「くつろぎ」「やすらぎ」を感じる「機会」となっていた事が明らかになってきた。また御会式という行事に自らが参加することによって非日常の体験をし、気晴らしの要素も含んでいたのではないかと思われる。

IV. 参考文献

- ・西野仁『月刊レクリエーション』1999, 3月号
- ・ヨゼフ・ピーパー『余暇と祝祭』講談社学術文庫, 1988
- ・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』中央公論社, 1973
- ・ブッダ『真理のことは感興のことは』岩波文庫, 1978
- ・アリストテレス『ニコマコス倫理学 上・下』岩波書店, 1971
- ・櫻井徳太郎『講集団の研究』吉川弘文館, 1988
- ・日蓮宗宗務院『日蓮宗事典』東京堂出版, 1981
- ・中尾堯『日蓮信仰の系譜と儀礼』吉川弘文館, 1999